

第八章 犬神家の祭り

獄門島に朝が来た。

来島した初日に泊まった漁師旅籠の”本陣”から苗院坂(びょういんざか)を少し上った二間続きの空き家が、島の役場が持っている官舎で、お能ちゃんの島での住居になった。

島全体で六十世帯ほどの村なので、ほどなくすべての家を把握できることだろうが、島の外から来た住人はお能ちゃんを含めてわずか三人。苗院坂を登った丘の上のお寺の苗院に住む横溝氏と、本陣の離れに暮らしている水島第一国民学校校長の太湖原(たいこばら)とお能ちゃんの三人だけで、あとはもともとこの島に生まれ育った人間か、嫁いできた女衆で、それとても何かしら島にゆかりがある縁故なので、全く無縁の住人はこの三人だけだった。

太湖原校長は伊予の生まれで、定年退職した教員であつたが、村役場が頼み込んで単身赴任のような形で島に来てもらつて五年になる。本陣の離れに下宿するような形で食事の面倒まで見てもらつているが、今まで赴任してきてはほどなく兵役に行つてしまった男教師たちも、朝夕の食事は官舎から本陣まで出てきて相伴にあずかつていた。

本陣と国民学校の真ん中ほどに合同庁舎兼番小屋があり、役場と漁協と郵便局が設置されていた。ちなみに村長、漁業長、郵便局長は全て小太りの野々宮大治が兼任しており、一柳は役場と漁協と郵便局の事務方全てを一人でこなしていた。あとは手の空いた島のおばさんたちが順番で臨時職員として合同庁舎に詰めていた。

獄門島は愛媛と香川と岡山の中間あたりの海にぽつんと存在する孤島で、たまたま唯一開けた入り江が愛媛方面を向いていたから愛媛県の行政に押し付けられたような島だった。

「本陣と言うからには、江戸に向かう参勤交代の大名が四国から本州に渡る時にこの島を中継点にしていたんでしょうか？」

かつてはにぎわっていただろう島のことを思い浮かべながら、お能ちゃんは一柳に尋ねてみたことがある。

「そう思っていたけると有難い！あんたのように勘違いした人が観光に来てもらうたら儲けもんじゃと、わしが名付けたんじゃ！わしやなんてネーミングセンスにあふれとるんや。嬉しいのう。」

一柳は観光課長も兼任していた。

四月に入り、犬神神社で村の春祭りが執り行われる日が来た。この神社の主で神主でもある犬神右兵衛のぎっくり腰により、祭祀が執り行われるのか危ぶまれていたが、松山の高等学校に行っていた息子の清助が帰省して神主の代役を務めることになっていた。

一柳は新任教師のお能ちゃんの顔見世も兼ねて、早朝から犬神神社のお祭りの準備に連れて行った。

犬神右兵衛は来ていなかったが、息子の清助が先頭に立つて飾りつけの作業をしていた。

境内の隅で、毬つきをしている三人の娘がいた。犬神右兵衛の娘で清助の妹たちである松代に竹代に並代だった。

♪ひとつでたほいのよさほいのほい　うちの裏のせんざいに　雀が三羽とまつてホイ♪

この島に伝わる手毬唄に興味を持ったお能ちゃんが二人の娘たちに混ざって手毬唄を教わっている様子を、大きな杉の木の影から何やらメモを取りながら眺めている横溝先生の姿があった。

飾りつけの目途が立ち、皆が一度自宅へ朝飯を食べに戻る時、

「課長、お能先生、当家に来てください。朝飯も用意してあるぞなもし。横溝先生もどうぞ。おやじも待つとるぞなもし。松代、竹代、並代！家に戻るぞな！」

巡回診療で島に来た医療隊は薬剤師の横溝先生に薬を託していくので、犬神右兵衛の薬も横溝先生が管理していた。

犬神社から杉の大木の森を越えると犬神家の大きな屋敷が建っていた。数人の女達が赤飯のもち米を蒸かしたり、大鍋で煮物や汁を煮たり、あわただしく動いていた。

「又エ〜！又エ〜！」

気持ち悪い鳥の鳴き声のような音が聴こえた。早朝なのにまだ妖しく暗い北側の森から聞こえたような気がした。

「今の鳴き声何の声ですか？」

お能ちゃんは何やら奇怪な生き物のように感じて、清助に尋ねた。

「又エのなき声ぞなもし。」

「又エつて、あの鶴ですか？」

「あの又エも。この又エもないぞなもし。又エは又エしかおらんじやろ。」

鶴。サル顔タヌキの胴体へビの尻尾を持つ妖怪で、平家物語では源頼政に退治された記録がある。

お能ちゃんは頼政に退治された鶴が亡霊となつて旅人を襲う世阿弥能の「鶴」の舞台を見ていたから、”本当にいたんだ！”とビビったが、一柳も横溝先生も何も気にする気配がない。

その頃、犬神邸ではぎっくり腰で椅子に腰かけた犬神右兵衛が朝ごはんの残り物を九官鳥に与えていた。

「はいぬえちゃん、あーんして。ご飯ですよお。」

「又エ〜 チャン。又エ〜 チャン。」

九官鳥の又エちゃんだった。

その頃、島に一隻の漁船がやってきた。船には本州から犬神祭りに来た犬神信仰の一行が乗っていた。

「あの男は誰ぞなもし？」

一人だけ水泳パンツ姿のまま船の上で呆然とたたずんでいる男がいた。

「悪霊島に流れ着いた漂流者だぞなもし。」

「悪霊島つて、岩だけの無人島のあの悪霊島かなもし。」

岡山の中岡三世料理店で炒飯と麻婆豆腐を食べて体力をつけ、鬼ヶ島を目指して泳いで行ったはずの秋田のネロさんだった。潮の流れで鬼ヶ島に向かったつもりが無人島の悪霊島に漂着してしまい。たまたま通りがかった船に救出され、この獄門島まで連れてこられた。

絶海の孤島は。パラダイスと言う願望がもろくも崩れ意気消沈しているネロさんであったが、お祭りの赤飯と焼き魚にお神酒をいただいたネロさんは、体力気力を回復して今治方面に

向かつてまた泳いで行った。

「せっかくじゃから紹介しとくけん。」
と、犬神家を出ると一柳はお能ちゃんを連れて八墓に向かった。

かつては犬神神社を中心に大神信仰の一族が細々と生活する絶海の孤島であった獄門島であったが、壇ノ浦の合戦で敗れた平家方の船がこの地に漂着して、八人の武者と宝剣を携えた高貴な少年が乗っていた。

高貴な少年は犬神家の娘をめぐってこの地で生活していたが、やがて宝剣を置いて都に行つたまま戻つてこなかった。その宝剣がこの犬神神社に祭られている。

八人の落ち武者は時折来る海賊から村を守りながらこの地で一生を終え、丘の上に埋葬されている。八墓とはこの武者たちの墓を言う。この墓守をしている多治見家にお能ちゃんは連れていかれた。

多治見家には白髪の子の老婆がいた。正確な年齢はわからないが、この島で一番の高齢者で、お金さんとお銀さんと呼ばれていた。

「あなたは何処から来たじゃね？」

「東京です。」

「東京ゆうたら陛下様がおられるところじゃな。あつちの方角じゃ。」

「よくご存じですね。」

二人は毎朝皇居に向かつて礼拝しているので、方角はいつも頭にあつた。

「東京つてのは、京都の東じゃつたな。」

「いや、大阪の向こうじゃて。」

「馬鹿言つてんじゃねえ。大阪は広島と陸続きじゃ。」

「東京には天皇陛下が住んでおられるのだから、京都には誰がいるんだ？」

「京都はミカド様と坂東妻三郎が住んでるんじゃがな。」

「名古屋つてのは東京か？」

「名古屋は満州の首都じゃけに九州の隣じゃがな。坂本龍馬が治めているのが満州の名古屋じゃて。学校で教わらんかったか？」

「そんな昔のこと憶えてないじゃて。」

お金さんとお銀さんの会話にお能ちゃんは圧倒されて呆然とそのやり取りを眺めていた。

「ところで、あなたは何処から来たじゃね？」

話は振出しに戻った。

犬神神社参りの一団に、もう一人不似合いな男が乗っていた。ヨレヨレの着物姿にトンビコート、髪の毛はフケだらけのボサボサ頭。

大きなカバンを手に苗院坂を上つて行った。

犬神神社では大神清助による祝詞があげられ神事が始まろうとしていた。

一柳とお能ちゃん達も神社に戻つて来て神事を見守る中、その奇妙な男が境内にたどり着いた。

”与一君?”

お能ちゃんはその風体が似ていたので一瞬目を疑ったが、髪の毛が硬い與一君なら石川五右衛門のような頭になるので、服装は似ているけど別人だとすぐに気がつた。

「横溝先生!」

お能ちゃんのそばにいた横溝先生を見つけるとその男は周囲を気にしながら歩み寄ってきた。

「金田君!」

民俗学者の金田一(かねだはじめ)と言う男で、横溝先生の古い友人だった。

神社の本殿では犬神清助の祝詞と、犬神家の娘の松代、竹代、並代による舞が披露された。腰を痛めていた犬神右兵衛も番頭の猿造に背負われて神社に来ていた。その肩には九官鳥の又エちゃんが乗っていた。

「実に興味深い行事ですなあ。」

金田一は神事を見ながらこの島の因習に興味を持った。

祝詞の神事が終わると、本殿の隣の舞台では村人たちによる歌舞伎が始まり、お能ちゃん魚の煮物を食べながら歌舞伎に夢中になった。

その歌舞伎はこの島の歴史を物語にした歌舞伎で、能楽師の世阿弥の末裔の舞阿弥(まいあみ)と言う人物がこの島に訪れた際に、地元の言い伝えを謡曲にして、親しみやすいように華やかな歌舞伎仕立てにして島人に手ほどきしたと言う。そして、この地のために舞阿弥美一留無馬(まいあみびーちるんば)と言う舞踏を残して去って行った。

屋島の戦いで平家に敗れた源氏は、おいおい話が違っじゃねえか?とお能ちゃんが突っ込むと、隣の金田一が、

「歴史と言うのは勝った側の物語ですから、負けた側にも物語があつて当然です。僕はこちらの方が興味深いです。」
と小声で言った。

海に縁のない栃木県生まれの那須与一など馬もろとも海でおぼれ、そのすきに平家はさっさと逃げのび、壇ノ浦では源義経が平家に追われて船の間を八艘飛びで逃げ惑う。その隙に平家の勇者が安徳天皇と草薙剣を持つてこの島に逃げて来る。源氏は敵を見失つて鎌倉に帰るが、嫁の北条政子は平家筋、結局源氏は滅びて平家の天下になっちゃったと言う物語だった。

加賀の小松あたりの安宅関の物語も「勸進帳」とはずいぶん違い、山伏を装った弁慶と荷物持ちを装った義経を関守の富樫は見抜いていたので、弁慶に「その男が荷役のものであるなら手に持っている棒で打ち据えて見よ」と命じ、弁慶は涙ながらに主君の義経を打ち据えると言う物語りなのに、獄門島歌舞伎では日頃義経に生意気な態度をとられて腹に据えかねていた弁慶はこれぞ千載一遇のチャンス!と殴る蹴るわドツキ回すもので、見るに見かねた関守の富樫が「あんたそりゃあやり過ぎや!」と仲裁に入つて関を通してやる話になつていた。

めちやくちやだ!とお能ちゃんは思ったが、これが彼らの歴史観になつていた。

獄門島歌舞伎の後、本殿に奉納してある宝剣を開帳した。青く変色してボロボロの銅の剣だった。

八人の落ち武者に連れられてこの島に逃げ落ちたと言われる安徳天皇と草薙剣、そしてその血を継ぐと言われる犬神家。金田一はそこに興味を持ったが、島民は誰一人として気にする者はいなかった。

日も暮れかかると犬神社には篝火がたかれて笛や太鼓が鳴り響き、獄門島名物の舞阿弥美一留無馬が始まった。

お能ちゃんも能管を持つて来て演奏の輪に加わり夜は更けていった。

横溝先生はまた何かしらメモに書き込んでいた。そこには「小悪魔の手毬唄」と「小悪魔が来たりて笛を吹く」と書かれていた。